

里短歌会

10月詠草

シャツ干すと高く上げたる指先に触れてさやけき十月の風 岡本トシ
騒がしく猛暑の夏を鳴き継ぎし蟬の亡が枯れ草の中 松岡節子
思ひ出の詰まりし畑を手放しぬ彼岸花咲く別れ惜しむがに 松本幾代
曼珠沙華の華美しく咲き過ぎて残れる茎の秋冷に立つ 川口敦子
残業の灯りまぶしき工場をしばし眺める畑の向こう 上田安代
外国に散りたるままの屍の六十四年を何思ひしや 林 淑子
百円の重みずっしり胸うちに品定めをり精肉売り場 山代雅子
訪ねゆくところなき身もバーゲンの服に手をふれ値札探しぬ 園田トミ子
めずらしきひとり居の昼CDの音一杯に心を満たす 宮本雅子
思ひ出の幾つありしか赤とんぼ亡母とうたひし夕焼けの道 安見朱實

万句の里俳句会

10月句会

木犀のとめどなく降る一日かな 宮本雅子
秋天に二胡の奏でる音色かな 林 まつ子
秋天の真中通る武者行列 富田幸子
夫の忌を修し安堵の月の庭 松本久子
胡麻を干す爆ぜては軽くなりし音 中路郁子
流れには魚影空には渡り鳥 鋤本トミ
たたみ来る波こまやかに良夜かな 田中ひさ子
山間を白く染めゆく蕎麦の花 東 鈴子
風白くしろく流るや庭芒 稲田玲子
菊池野の夕日の果ても豊の秋 梅田昭子
谷川の小石も水も澄みにけり 光本とよいち
亡き友を偲びて摘みし野紺菊 小山照子

肥後狂句桜会

例会入選句集より

ああ寒さ 菊池盆地は冷蔵庫 光堀善教
ああ寒さ 忍者のごたる隙間風 狩野本六
ああ寒さ 飲み屋を出れば師走風 高木房恵
思い直し この子の為エ生き抜こう 窪田明德
思い直し 努力はいつか報わるる 小川繁美

泗水短歌会

10月詠草

久し振り田の道行けば荒草に野菊紫紛れずけり 中山定子
不自由なる吾身の現実受けとめて嫁のすすめるデイケアに行く 平嶋きくえ
九十年使い続けて手の硬し生命線をなぞり合 わせる 大島さと
木下陰ひっそり咲ける水引草小さい秋の日や がて暮れゆく 増田久美子
木犀は寂しき香なり夫の忌にすこし遅れて咲きたる今年 吉安永子
広辞苑書棚に背文字太ぶと貫禄示し出番は なかり 福原美智子

せせらぎ俳句会

9月例会

奥阿蘇に湯煙絶えず湯の宿の窓辺の夜気はいたく冷えたり 矢野悦子
過ぎし日に目線より昇りし月想う富士に觀し 高藤タツノ
月今宵は天上 高藤タツノ
三十度の庭より部屋に入れば秋たしかに此処は秋の冷えあり 長尾はるみ

秋風に声朗々と松囃子 寺本和子
白き月残りし朝の百舌鳥の声 服部静子
慰霊碑の寂びて秋風哭くばかり 五丁義昭
郷愁は韓の山川蕎麦の花 藤本邦治
背なの孫と仰ぎし雁の棹となり 村山数恵
彼岸花咲きし棚田に佇みて 藤本アツ子
十六夜の宴の卓に被衣 内村泊虹
さわやかな秋風に乗りペダル踏む (高一)渡辺一史
文化祭のお化け屋敷もできあがり (高一)渡辺大寿

肥後狂句水笑会

10月例会

百均 馬の角まで有るかいた 続 義昭

七城短歌会

10月詠草

歳ばいた 人のお洒落も気にならん 中島五女
歳ばいた 何もなかとけさでこけち 御手洗三代
夜の長さ 瘦瓶も二つ要るごたる 神尾迫水
夜の長さ やっぱ寝るしきや能の無ア 井手水光
出世して 昔の彼女ふりむかせ 吉岡三水
運動会 孫はどこらにおつとやら 柏原乗仏
百均 ついついかごに入れよらす 宮上美由
歳ばいた 他所エ行くとも苦になつて 平井紅彩
運動会 飯のときだけ顔出さず 山隈好茶

旭志文芸俳句会

10月詠草

野仏のおわす畦道彼岸花 芹川のり子
彼岸花手向けし墓碑や千の風 水谷ミネ
念願の墓参叶うや秋彼岸 東 芳子
散水の焼け石に水ちちろ鳴く 芹川蓉子
野仏も貰いておわす彼岸花 中尾ヨシコ

